

一貫した英語学習のために  
実践的コミュニケーション能力向上を目指して

原田康也・早稲田大学法学部教授

harada@waseda.jp

<http://www.f.waseda.jp/harada/index-j.html>

文部科学省の『英語が使える日本人』戦略構想（2002年7月に策定・公表）・同「行動計画」（2003年3月に公表）などに見られるように、英語運用力に対する社会の具体的な要請が高まっている。早稲田大学においても『21世紀の教育研究グランドデザイン策定委員会英語教育ワーキンググループ(委員長：田辺洋二 JACET 会長)の最終答申（2000年7月報告）』の中で『議論ができる英語』教育の実施がうたわれている。

実践的コミュニケーション能力向上を目指すとき、個別スキルの孤立した訓練だけでは成果を得ることが期待できず、聞いた内容や読んだ内容に基づいて質疑応答をし、質疑応答の内容を元に口頭発表をして文章を書く、というように読み・聞き・話し・書く、という作業が相互に関連しあう統合的課題を中心とすることが必要である。（試験においても、ETS (Educational Testing Service) の LanguEdge を例に見ると、5分ほどのレクチャーないし対話を聴いた上でいくつかの質問に答える、あるいは1ページほどの資料を読んでその内容について要約した上で自分の意見を口頭で述べ、または文章でまとめる、といった統合的課題が中心となっている。）

こうした到達目標を想定として、法学部に入学する学生の8割ほど（TOEICで400点から600点ぐらい）に当てはまる重点的な課題をまとめると、以下のようなだろう。

- 1) 英語のリスニング訓練が徹底的に不足している。
- 2) 英語を使う訓練と場が徹底的に不足している。
- 3) 英語・日本語を問わず、読書量が徹底的に不足している。
- 4) 英語・日本語を問わず、自分の考えを整理して文章にまとめる練習が不足している。
- 5) 英語・日本語を問わず、質問に対して直ちに応答することができない。

筆者自身の現在の授業では、英語ニュースを使用したリスニング練習を中心とする授業でも **graded reader** などによる **extensive reading** とその内容についての少人数での応答練習を取り入れている。英語による文章作成を中心とするクラスでは、文章作成と学生の相互チェックに基づく修正作業に先立って、3人を1グループとする口頭応答練習と5・6名程度のグループで相互に行うミニ・プレゼンテーションなどを行っている。3・4年次配当の科目においては、PCとプロジェクタが設置された部屋を使用して、PowerPointなどを使用してプレゼンテーションを行いつつ、質疑応答や意見交換の結果を文章としてまとめる作業を進めてきた。

『大学の英語の授業』は訳読中心という古典的なイメージが抜けがたいようで、筆者の

授業を見学した方からは、『大学の英語の授業がこれほど変化しているとは思わなかった』といった感想をいただくことが多い。授業の進め方にはこれからも改善すべき点が多いが、ここで記したことは大学固有の課題もあるものの、大部分は小学校・中学校・高校・大学・大学卒業後を通じて求められる共通の目標であろう。しかし、中学と高校、高校と大学は、それぞれ入試という壁に仕切られ、関係する教員が英語教育について交流することは従来まれであった。大学と企業もまた、一貫した英語習得という観点から連携を構想することはなかったが、今後は『生涯を通じた一貫した英語学習』という観点から関係者が協力することが必要である。

これを可能とする前提には、いくつかの要素が考えられるが、もっとも重要な点は、初級者から上級者まで統一的に学習到達度を図ることのできる一貫した尺度を使用することであろう。中学での英語教育が教科書と高校入試に規定され、高校での英語教育が教科書と大学入試に規定され、大学での英語教育が具体的な到達目標を欠き、大学卒業後の英語研修がまたしてもペーパーテストの点数に拘束されるという状況では、一貫した英語力向上を実現することは難しい。学習者には、いま自分がどのようなレベルにいるのか、統一的な尺度で目安を示すこと、授業や研修の担当者には、学習者集団の到達度が全体として上昇しているかどうか、どのプログラムの参加者の到達度が上昇しているか、個々の学習者のうち誰が上昇しているかなどの情報を統一的な尺度で提供できなければ、学習プログラムの改善を客観的に行うことができない。(こうした観点から参考になるのは、Council of Europe による *Common European Framework of Reference for Languages: learning, teaching, assessment* であろう。)

英語学習のさまざまな側面について、語彙・文法・読解・聴解・文章作成・口頭での質疑応答などについてさまざまな試験が提供され、日本では現在英検と TOEIC が広く知られている。大学では TOEFL を採用する場合もあり、CASEC も普及しつつある。このほか、口頭英語の試験として、SST や PhonePass がある。生涯を通じた一貫した英語学習のための尺度として有効活用するためには、初級者から上級者まで統一的なスコアを得られること、何度も繰り返し受験できること、必要な時に随時受験できること、受験後直ちにスコアが提供されること、受験に時間がかかり過ぎないこと、十分に安価であることなどが求められる。こうした共通の尺度をもとに、『生涯を通じた一貫した英語学習』のための情報共有と意見交換を通じて共通理解を得ることが英語教育に関わるすべての関係者に求められている。